

東日本大震災と「心の花」① 藤島秀憲

東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故を詠んだ歌が「心の花」に最初に掲載されたのは平成二十三年六月号である。六月号の原稿締め切りは三月二十五日だったので発生から二週間、いったいどれくらいの人が震災や原発（以下、震災と書く）の歌を詠んだのだろうか。

六月号の全出詠者は五〇六人。うち一五六人がなんらかの形で震災を素材にした歌を詠んでいる（連作のテーマとして震災を詠んでいなくても、一首でも震災の歌があればカウントしている）。三人に一人。多いか少ないかはさまざまな考え方があろうから簡単には決められないが、早いというのが、わたしの率直な感想である。発生から二週間で、一五六人が詠んだという事実に驚く。短歌の即時的性格、機会詩であることを改めて実感した。

六月号以降、震災の歌がどれくらい詠まれているか数えてみた。

六月号	一五六人
七月号	一六〇人
八月号	九二人
九月号	四五人
十月号	四三人

七月号も多い。「心の花」は東北地方の会員が少ないので、当然ながら被災者の歌は少ない。テレビを見ている歌、知人を心配

する歌、自身の生活への影響を詠んだ作品が大半を占める。

九月号・十月号になると激減、四分の一になる。しかも、連作のテーマに据えるのではなく、他のことが歌われている中に、ぽつんと一首置かれていたという形もあるので、歌の数を比べれば、十分の一以下になるだろう。詠むのも早かったが、詠まれなくなるのも早かった。

六月号では震災の歌と、それ以外の歌の区別が明らかだった。しかし、時間の経過とともに区別が曖昧になった。たとえば、

・余震やや遠のきたるに梅干しと梅酒らつきよう今年も漬けぬ

田中江子（九月号）

・鹿児島に住める子どもに電話してヒナの様子をちくいち話す

矢野良彦（十月号）

田中は茨城県在住、七月号では大きな揺れを体験したことを歌っている。六月半ば、震災から三カ月。今年も漬けることのできる喜び、だが素直に喜べない複雑な心境が歌われている。

矢野は東京在住、八月号に「高濃度汚染地域の首都圏ゆ妻子逃して ゴミの日を知る」という歌がある。ほのぼのとした歌も背景を知ると、逆に切なくなってくる。

・コンビニの照明暗しレジ横の義捐金箱膨らみてゆく

眉村揺子（六月号）

短歌の記録性が生かされた一首。埼玉に住むわたしは大きな揺れを体験し、さまざまな生活の不便を味わったが、当時の記憶は既にぼんやりしてしまっているので、この歌を読み返してびつくりした。発生二週間以内なのに作者・眉村が住む徳島でも節電が行われ、義捐金が集められていたのだ。